2023.02.25

「徳川家康と掛川城のかかわり～掛川城の戦いを中心に～」

徳川家康の掛川城攻め

加藤理文（[公財]日本城郭協会）

今川氏の凋落と家康・信玄の侵攻戦

永禄３年（1560）、桶狭間の戦いで今川義元が討死すると、嫡男氏真が後継となりました。当初、松平元康（後の徳川家康）は今川方として織田軍と戦かいましたが、やがて、信長と同盟を結び自立し、反旗を翻します。氏真は三河を失い、続いて「遠州忿劇」と呼ばれる国衆の大規模反乱もあり、徐々に求心力を失っていきました。この状況を見た武田信玄は、今川氏と同盟関係にあったにも関わらず、家康に今川両国の分割を持ち掛け、永禄 11 年、共闘し駿河と遠江への侵攻を開始したのです。

12 月 13 日、武田軍が駿府へ乱入すると、狼狽した氏真は重臣筆頭で一族の朝比奈泰朝の居城掛川城へわずか 50 騎ばかりで逃れます。突然の逃避行となり、正室・早川殿（北条氏康の娘）は輿にも乗れず、裸足・徒歩での脱出だったとも云われています。信玄の駿府侵入とほぼ同日に遠江国への侵入を開始した家康は、同国内の今川方の諸城を次々と陥落させ、12 月 18 日には引間城（浜松城）へと入城を果たしました。

第１図　徳川家康と武田信玄による遠江・駿河侵攻

家康の掛川城攻めの開始

秋山虎繁の遠江侵攻があり、武田氏に不信感を抱いた家康は、早急な遠江一円支配をめざし、東遠江の拠点・掛川城へと軍を進めました。攻城戦を前に、旧今川配下の周辺諸将に対し調略をすすめ、掛川城より西側一帯を領有する久野氏一族を味方に引き入れ、背後の安全を確保することにも成功します。12 月 27 日、不入斗（袋井市）へ陣を進め掛川城へと迫りました。この間に、信玄からの知らせで駿河守護の今川氏真が籠っていることは承知済であったと思われます。家康は、掛川城を包囲し、城下に火を放ちますが、本格的な城攻めをすることなく、周辺に付城（砦）を築き撤退してしまいます。この時築かれた付城は、掛川城に対する偵察及び、万が一攻城戦になった場合の拠点確保のためで、高所から城を見渡すことを主眼に置いたものでした。家康は、掛川城に籠る氏真を孤立させるため、周辺域の国人領主や在地土豪層の旧今川家臣の本領安堵を約し、次々と味方に引き入れていったのです。

家康の掛川城攻めと氏真の徹底抗戦

見付（磐田市）に戻り体制を整えた家康は、青田山砦に小笠原信興、岡崎衆番手を二藤山（笠町砦）に、金丸山砦に久野宗能らを入れ、翌正月 17 日に自ら天王山（「浜松御在城記」では「外天王山」）に布陣し掛川城攻めを開始しました。両者の距離は、約 900ｍと、ほとんど目と鼻の先だったのです。これだけ近距離に家康が陣を布いたのは、氏真への牽制でした。今川方もただ城に籠もっていただけではありません。周辺諸将に対し調略の手を伸ばし、城から外に討って出ていたことが記録から判明します。20 日には「天王寺」、21 日は「天王小路」、23 日「天王山」、28 日「天王社路」

第２図　家康による掛川攻めの付城群

と、家康本陣周辺で戦いが繰り広げられています。21 日には本陣の土塁を突き崩されるなど徳川軍が劣勢となってしまいますが、23 日に入ると「氏真兵多死」とあり、両軍ともに多くの犠牲者が出たようです。掛川城攻めが始まると、浜名湖周辺の気賀・堀川と日坂八幡山（事任八幡宮）で今川方の一揆が蜂起し、掛川城攻めは膠着状態となってしまいました。

掛川城攻めが長引くと、家康は、氏真に使者を遣わして和睦を求めます。未だ遠江国内状況が不安定の中での長期戦は、決して家康にとって望む展開ではなかったからです。また、今川家当主であり幼馴染の氏真を戦死や自刃に追い込むことは避けたかったとも思われます。それが、和睦による開城へと決断させた真意ではないでしょうか。和睦を図る中、徹底抗戦を続ける堀江城（浜松市）の大沢基胤らにも調略の手を伸ばすなど、執拗な家康の懐柔策によって、抵抗勢力も沈静傾向へと向かい、掛川城に籠る氏真はますます孤立を深めていったのです。

写真１　陣場峠（青田山砦）より見た掛川城

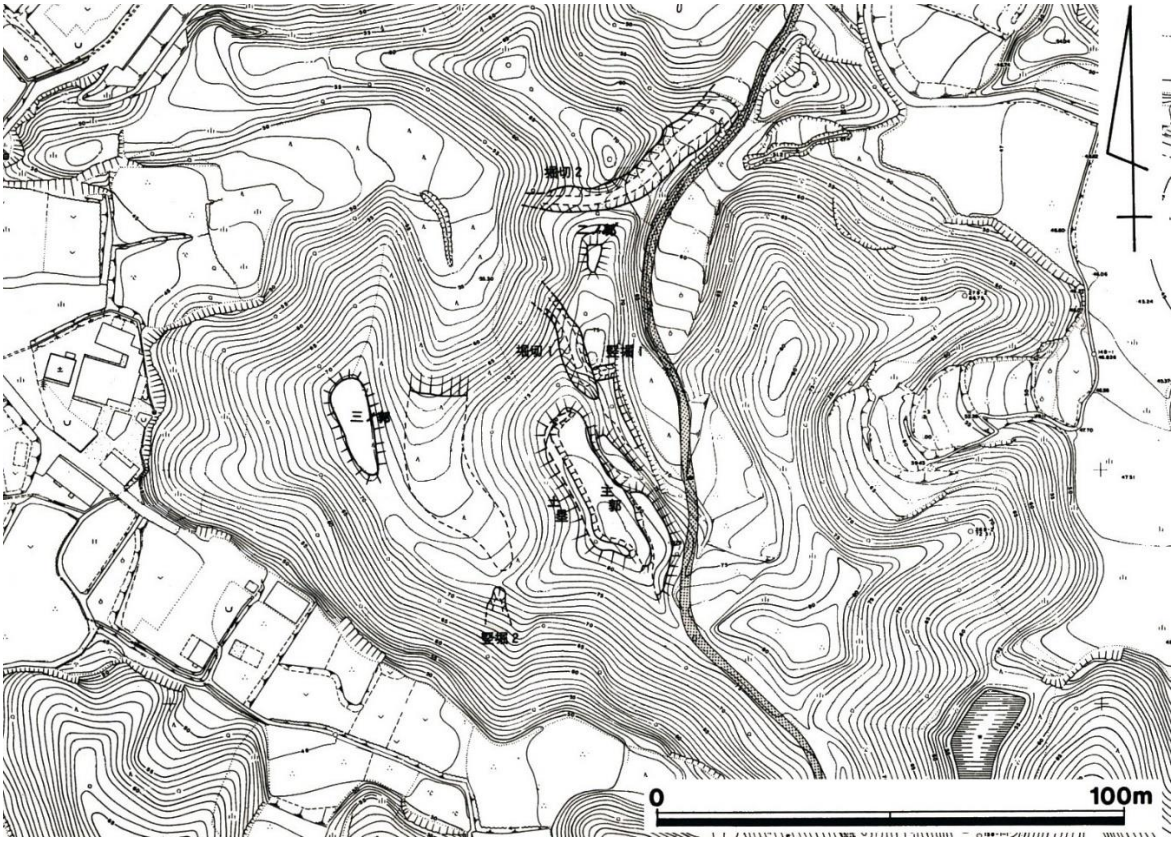
掛川開城と戦国大名今川氏の滅亡

家康は、3 月に入ると、氏真のもとに使者を送り、「駿府から武田軍を追い払った暁には、氏真殿に駿府をお返しする」ことを申し入れたと云います。5 月に入って掛川城の兵糧が欠乏すると、氏真は 17 日に開城要求を受け入れ、義父北条氏康の領国である伊豆国に退去することとなりました。北条氏も氏真を庇護下に置いて、氏政の子・国王丸（のちの北条氏直）を氏真の養子とすることで今川領を事実上受け継ぐことになります。ここに戦国大名としての今川氏は滅び、その後氏真が駿府に戻ることはありませんでした。5 か月を越える籠城戦を戦った掛川城は、難攻不落の称号を手にし、

家康は城攻めが苦手と言われるようになってしまいます。掛川城は、豊臣政権下でも重要視され、山内一豊が城主となり、天守を持つ近世城郭を完成させ、江戸期には譜代大名が入れ替わり城主を務めることになります。

発掘された付城(砦)の姿

掛川城攻めの付城で、唯一全面的な発掘調査が実施され、その構造が判明したのが杉谷城です。城跡は、掛川城の南東約２㎞に位置し、南北約 150×東西約 100ｍの規模を持つ砦でした。明瞭に城郭施設として利用されたのは、標高約 82ｍの最高所に位置する主郭（南北約 35×東西約 10ｍ）のみです。主郭は、東側を除きコ字状に土塁が築かれ、東側下段に二段の腰曲輪状の平坦地が残ります。北側尾根筋を幅７ｍ前後の堀切と接続する竪堀によって遮断していますが、南側に位置する主郭とほぼ同規模・標高の頂部との間は、自然地形のままでした。主郭の土塁と堀切は、軸を合わせるように設けられており、西側谷筋からの攻撃に備えています。



第３図　杉谷城跡実測図（掛川市教育委員会提供）

二の郭（南北約 25×東西約８ｍ）にあたるのが主郭北側の曲輪で、南から北にかけて低くなり、最北端に３×５ｍ程の高まりが見られます。土塁の痕跡、あるいは北側対岸との間の橋台とも考えられます。二の郭の人為的な痕跡は、この高まり部分のみ

で、他は自然地形のままでした。二の郭北側に、城内最大の堀切（幅約 10m・深さ 6m）が見らますが、一部後世の道として利用されているため、当初の規模は判然としません。主郭に比較すれば、二の郭は南北を堀切で囲まれた独立曲輪となっていました。二の郭を独立させることで、主郭は北側に対して、より強固な防備を有することになります。いずれにしろ、この堀切以南、主郭までが防御施設として利用された範囲であることは確実な状況です。

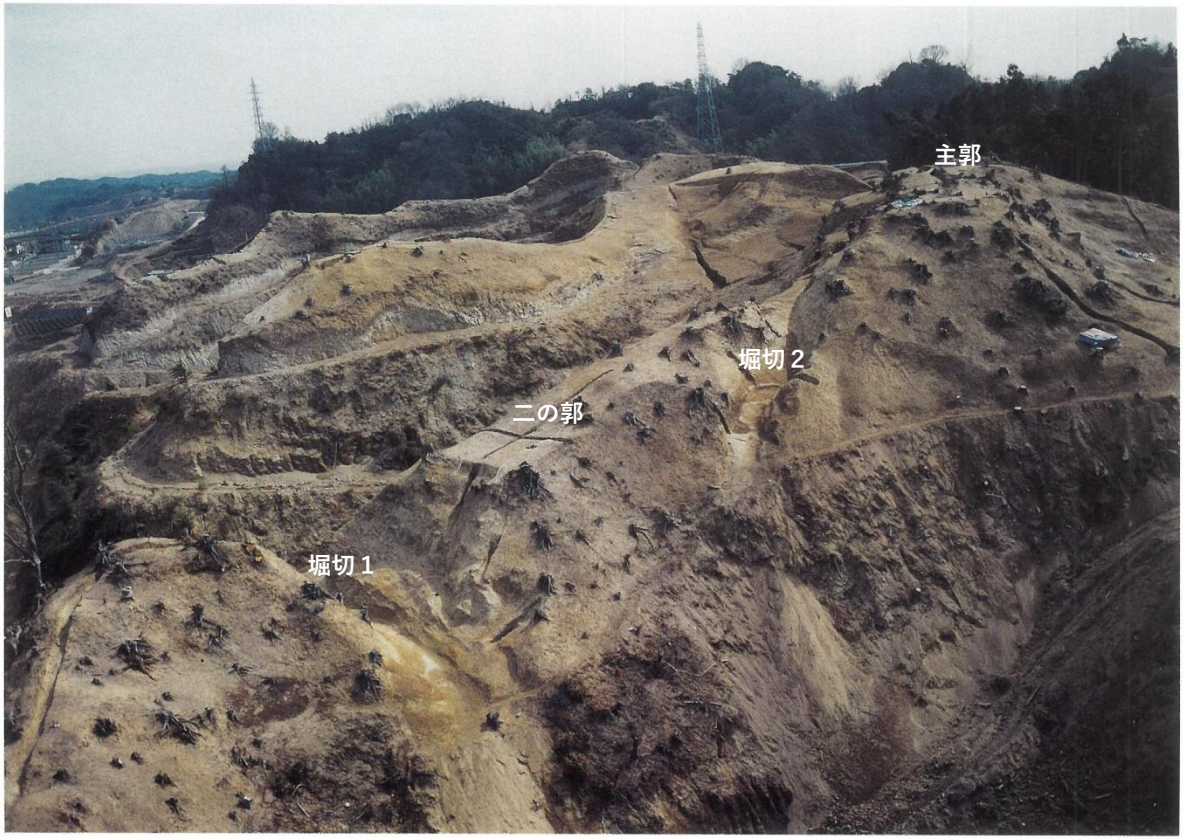


写真２　杉谷城完掘状況（掛川市教育委員会提供）

付城構築の目的

杉谷城は、主郭・二の郭以外が、まったく利用されていなかったというわけではありません。臨戦態勢下においては、北側に位置する尾根上の頂部や三の郭、東側尾根上の頂部などは、見張りを兼ねて兵が置かれた可能性は高いと考えられます。

周辺域の地形を見ると、南側の尾根続きを遮断することなく、撤退ルートとして確保しています。杉谷城の西南側約 500m離れた尾根上に青田山砦が存在していました。この砦は、標高約 108mの山頂部を中心に展開する砦で、杉谷城より 20m以上高い山塊を利用しています。掛川城の南に構築されたのが、杉谷城と青田山砦で、この二城を持って南方の押さえとしたのでしょう。掛川城に籠城する今川方兵力を考えれば、南側に構築された二城を同時に攻撃することは、ほとんど不可能に近い状況でした。

どちらかが攻められた場合、総力戦になる前に撤退し、敵方の退却を待つ程度の押さえとして考えていたのではないでしょうか。双方の城が補いあうことによって、無駄な兵力の失うことをさけ、孤立する掛川城の南側の押さえをすることが徳川方の目的だったのです。

記録に見る付城(砦)の姿

『武徳編年集成』にわずかに砦に関連する記述が見られます。相谷砦の記述で、永禄 11 年 12 月条に「味方ノ六備掛川ノ城下ニ迫リ御旗本ハ相谷ニ屯ヲ設ケ玉フ…」とあり、兵が駐屯する場所を設けたことがわかります。次いで、長屋砦の記述で、永禄 11 年極月条に「桑田村ニハ酒井忠次、石川家成柵ヲ結テ守リケルガ…」とあり、柵で囲って守っていたと記されています。また金丸山砦では、永禄 11 年極月条で「金丸山ノ附城ニハ本丸ニ久野宗能同二ノ丸ニ同佐渡宗憲、本間五郎兵衛長秀ヲ籠置ル」とあり、本丸と二の丸が存在する砦であったことが伺えます。杉谷城の調査は、これらの記載とほぼ合致する状況でした。両曲輪の周辺に柵等が廻っていたのでしょう。

織田・豊臣軍は、攻城戦のみの簡易施設として陣城（付城・取手・要害・対の城など）を多用しています。毛利氏や尼子氏も陣城を構えていますが、その構造は山城そのものでした。ところが、織田軍は居城と陣城を明瞭に使い分けしています。

桶狭間合戦の前哨戦と言われる家康の大高城兵糧入れですが、合戦の契機となったのは、信長の築いた付城によって、今川方の鳴海城と大高城が落城寸前まで追い込まれたがためです。両城は、国境に位置するだけでなく伊勢湾に面した海上交通の要衝でした。信長は、両城を奪還するために、鳴海城の周辺に丹下砦、善照寺要害、中嶋砦を構え、大高城には丸根砦、鷲津砦を築いて、両城の連絡を遮断したのです。義元は、自ら出陣し国境の両城を救出するだけでなく、さらなる拠点確保を狙ったのです。家康は、大高城入城によって、付城の効果を身をもって体験しており、その経験から掛川城攻めで多数の付城によって、今川方を降伏開城に追い込んだのです。

さらに、元亀 3 年（1572）から足掛け 10 年間に渡る武田軍との攻城戦では、こうした付城を多数築く戦略で、二俣城、高天神城奪還に成功しています。家康が、大坂城に籠る豊臣氏を滅亡に追い込んだのも「大坂城包囲網」と呼ばれる全国規模の付城群構築による成果でした。

[参考文献]

1996　『掛川城のすべて』　掛川市教委
2001　『掛川古城跡』　掛川市教委
2002　『東名掛川Ⅰ・C 周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』掛川市教委
2021　加藤理文　『家康と家臣団の城』　角川選書

『歴史群像』4 月号（NO.178）連載「戦国の城」は、「掛川城攻めの付城群」です。